

三年 道徳教材

どうとうくまのよぼうざい

ピオーネ作りへの思い

せいさんだんち

くピオーネ生産団地のれきし





みなさんは、「黒い真珠・ピオーネ」を知っていますか。

「黒い真珠」とは、三次生産団地で作られる「ピオーネ」というぶどうのことです。どうし

てこのような名前がつけられたのでしょうか。

一九七四年（昭和四十九年）七月、二十四戸の農家の人々が集まり、組合を作りました。それまでに、ぶどうの栽培を経験した人は一人もいませんでした。

まずはじめに、農家の人たちは、ぶどうを植える

くわ入れ式の様子

畑を作り始めました。木を伐採し、草や石を取り除き、山林を畑にかえるのです。ブルトナーザーなどの大きな機械もありましたが、みなで、かまやのこぎり、くわなどをもって家族全員で働きました。

「あの頃は、小さな子どもたちのこともほったらかしでした。それぐらい、みんなで一生懸命、畑をつくったのです。」

とピオーネ生産団地の方はお話ししてくださいました。

はじめは、その頃の人気の「巨峰」というぶどうを植える予定でしたが、その年に開発された「ピオ

「ネ」という新しい品種のぶどうを植えることに変更しました。「ピオーネ」は、「巨峰」と「カノンボールマスカット」を組み合わせて作ったぶどうでした。これは、農家にとっては大冒険でした。そこから、「三次ピオーネ」としてぶどう作りが始まったのです。苗が小さいころには、木と木の間にはスイカを植えて、それを売って生活をしていました。

二年後、ほんのわずかですがピオーネが初出荷されました。「この味ならいける。」と少し自信が持てたそうですが、販売ができる量にはまだまだたりませんでした。また、大雪や大雨、台風などの自然の災害でビニルハウスがこわれたり、ぶどうの木が折れたりするなど、困難なことは続き、生産組合の

二十四戸の農家は、二十一戸にへってしまいました。農家の人々は話し合いと研究を重ねました。おいしいピオーネを作るための勉強会を開いたり、家族やほかの農家の人たちと協力して働いたりして、少しずつ軌道にのってきました。

一九八二年（昭和五十七年）、生産組合から出荷するピオーネに「黒い真珠・ピオーネ」という名前をつけました。世界に一つだけの名前です。現在、三次ピオーネ団地では、三十五ヘクタール（マツダスタジアム三十個分）の広さでピオーネを作っています。

「今も、農家一戸ずつが責任を持ち、三次ピオーネの品質を落とさない努力を続けています。そし



て、日本国内こくないはもちろん、

外国がいこくにも『黒い真珠・みよし

ピオーネ』を売ることに取

り組んでいます。そのため

に、一粒つぶ、一粒を愛情あいじょうを持

って育てそだて、一房ふさ、一房をてい

ねいに見て出荷しゅっかをしていま

す。後あとを継つぐ若い人たちも

育ち、これからのピオーネ作りに期待きたいが持てま

す。」

と、生産団地の方は目を輝かがやかせました。

三次ピオーネ生産組合せいさんくみあいが

うぶ声こゑをあげた。

組合員くみあいいんはお互たがいの

意思疎通いしそつうをはか図った。

それは、仮設小屋かせつごやと日の丸まるだった。

「きつとこの地ちに

翠みどりしたたるぶどう園えんを……」

と誓ちかい合った。



1974年 「パイオニア精神」開拓かいたくのころ